始れる故に、其を名に負せたるにて、古は久須理とも、久須泥とも云けむと所念ゆ、今も物を措貼ることを、久須理貼るとも、許須理貼るとも云めり、また久須具流と云語も、體に指なすり付る狀なども由有げなり、然るは、本草和名に、石斛者山精也、又石精也、出神仙服餌方、和名須久奈比古乃久須禰、一名以波久須利とあり、和名抄にもかく有りて、石斛石草之名也、圖經云、五月生、苗莖似竹節、七月開花、十月結実と云へり、今は古きに依て、本草和名を引きつ、これ久須禰とも、久須利とも云る證なり、須久奈比古乃久須禰とは、少毘古那神の藥と云ことにて、諸藥この神の御靈に賴ざるは有まじき中に、此藥は、殊に用給へる故に、當昔よりかく名を負るならむ、以波久須理と云は、此草はも、石斛、山精、石精など、漢人も名けたる如く、岩に著て生る物なれば、久須理と云は、貼る義なる故に、かく名を負るか、岩に生て久須理に用ふる物なる故にいへるか、何れに見ても、久須理、久須禰、同言とは通えたり、

〔奇魂二〕藥方○中略

彼○漢土も、いと古は病あれば神に祈り、あるは移精變氣などいひて、此の禁厭の如きわざをし、はた內經などを見るに、主と鍼して、萬病を治て、藥のむわざはいと稀也けるを、漢の比、仲景などよりぞ、專ら藥を飲するわざと成にける、是に因て、後世、謂に方の出來し也、今此の人○日本人の假初の病にも藥するは、彼の風に化たる也、さて漢のは、其藥は、其經に入など虛言しつゝ、許多の品を配合めるは誤也、又一品一能もて配合法に拘らぬも偏也、神代にすら、さばかり法の有しにはあらずや、

初見

〔古事記上〕其八十神、各有欲婚稻羽之八上比賣之心、共行稻羽時、於大穴牟遲神負佩爲從者、率往、於是到氣多之前時、裸菟伏也、○中略於是大穴牟遲神敎告、其菟今急往此水門、以水洗汝身、卽取其水門之捕黃、敷散而輾轉其上者、汝身如本膚必差、故爲如敎其身如本也、

〔古事記傳十〕蒲黃、和名抄に、唐韻云、蒲草名、似蘭、可以爲席也、和名加末、陶隱居本草注云、蒲黃蒲花